関連学会印象記

第38回日本心臓血管外科学会

明　石　英　俊*

平成20年2月20日から22日までの3日間，第38回日本心臓血管外科学会学術総会が久留米大学医学部外科学主任教授　青柳成明会長主催のもと，福岡国際会場で開催されました．今回のメインテーマは“エビデンスから新たなチャレンジ”で，心臓血管外科領域においても，急速な発展の時期は過ぎ，これまで突き進んできた心臓血管外科の結果を確認し，新たな着実な発展を目指そうというものでありました．現在の医療情勢に適したメインテーマであったと思われます．

学術総会においてはまず初日の朝からプレナリーセッションで4題の優秀演題が発表され，同時に表彰と記念品授与も行われました．内容はフォンタン手術の遠隔成績，僧帽弁形成術，心不全に対する人工心臓治療，感染性大動脈瘤の演題でした．このセッションでは指定討論者も国内のトップクラスの著名な先生方がお引受け頂き，内容の濃い討論が行え，また演者の先生方も注目されるセッティングであり，これからも若い先生方の発表の目標となるでしょう．

シンポジウムは6つのテーマについて企画され，ステントグラフトを含めた弓部大動脈瘤の治療，虚血性下腿潰瘍の治療戦略，狭小弁輪に対する大動脈弁置換術，重症心不全の治療，虚血性僧帽弁閉鎖不全症，ファロー4徴症の遠隔期の問題点などでありました．これらのテーマの中での注目点は“低侵襲なステントグラフト治療が大動脈弓部においてどこまで可能であるか”，“重症虚血肢に対して手術以外の血管内治療（ステント）や血管新生療法やフットケアーがどこまで効果を発揮できるか”，“狭小大動脈弁輪に対して人工弁のミスマッチは存在するのか”，“心臓移植が発展しない本邦で重症心不全を様々な治療法を駆使してどこまで治療できるのか”，“虚血性心疾患に合併した僧帽弁閉鎖不全の治療法の選択”，“過去に急性期予後を改善できたファロー4徴症の遠隔期で問題点をどう解決するのか”といったことであり，結論まではでないものの，現時点での状況と治療選択方法は明らかにできたものと思われました．現在の治療はどのテーマについても，一つの方法で治療ができると言うものではなく，いくつもの治療の適切な組み合わせと適切な時期と適切な適応が効果を生むと言うことの重要性が指摘されたと思います．

国外からの招請講演にはアメリカから6人（Jon S Matsumura, Dhirai M Shah, Joseph S Coselli, Patrick M McCarthy, W Randolph Chitwood, Charles D Fraser）とヨーロッパから2人（Ruggero De Paulis, Gianni D Angelini）と韓国から1人（Kyung Sun）を招待いたしました．中でもMatsumuraのステントグラフトの講演は超満員で入りきれないほどの聴衆でありました．またMcCarthyは日本での滞在時間が約半日というハードなタイムスケジュールで主催者側が心配するほどの過密日程でありました．ビッグネームであるCoselliやChitwoodの講演にも多数の人が集まり，熱心な討論が行われました．大動脈外科のopen surgeryの大家であるCoselliにおいてもステントグラフトを併用する治療を行っていることは印象的でした．De Paulisは若手の外科医でありますが，Aortic root graftを用いた大動脈基部の外科には多くの心臓血管外科医が興味を示しました．そして，これらの招請講演者はほとんどが併設されたランチョンセミナーの講演者も担当して頂きました．

2月21日の第2日には会長講演，理事長講演，特別企画が行われました．

*久留米大学外科

Presented by Medical*Online

写真1　会長講演　青柳会長

写真2　高本教授

青柳成明会長の講演（**写真 1**）は会長の生涯のテーマである“弁膜症の治療成績の向上に取り組んで”という演題名で行われました．機械弁における血栓弁やパンヌスの研究やPPSについての研究，さらには弁形成術の進歩などが弁膜症の治療の歴史を振り返りながら講演されました．

理事長講演では東京大学心臓血管外科の高本眞一教授（**写真 2**）（日本心臓血管外科学会理事長）が現在，厚生省を中心に法案化されつつある医療安全委員会（仮称）の構想が説明され，医師法21条の取扱のことも含めて，医師の通常の診療での刑事訴追が安易に行われないようにしたいとの意向が会員に伝えられました．この講演は今後の日本の医療に大きく影響を与えることになる構想が述べられました．

特別企画は“心臓血管外科にける施設集約化にむけて”というテーマで，司会が高本眞一先生，演者が行天良雄先生（元NHK解説委員），伊藤雅治先生（全国社会保険協会連合会理事長），信友浩一先生（九州大学医療システム学教授），山本文雄先生（秋田大学心臓血管外科教授）で討論がそれぞれの分野からの意見も出されて，討論されました．この様な企画が医学界のメンバーだけでなく，他の分野からの意見も交えて行われたのは斬新なことであり，演者にとっても，聴衆にとっても非常に興味深い討論となりました．

医療安全講習会と卒後教育セミナーはこの心臓血管外科学会では毎回，必須の企画であり，特に今回の医療安全講習会ではささえあい医療人権センターコムルの辻本好子先生の患者と医者の相互理解とコミュニケーションについての話がありました．今後の診療での患者との関係や会話のあり方などで直ちに役立つ内容であったと思われました．

最終日（第3日）の最終企画として“私の手術手技，ここが手術成功のポイントだ！”が開催され，冠動脈外科（渡辺剛先生），小児心臓血管外科（角秀秋先生），大動脈外科（数井暉久先生），末梢血管外科（笹島唯博先生）が講演されました．日本の心臓血管の各分野の第一人者が手術成功の秘訣についてビデオを交えながら，分かりやすく解説していただき，論文や通常の学会発表などではあまり話されないような具体的なとこまで質疑応答がなされました．学会の最後を飾るにふさわしい内容でありました．

今回の第38回日本心臓血管外科学会を振りかえって見て，全体的な印象としては，心臓血管も成熟期に達しており，短期間での急激な進歩というような話題は殆どみられないが，治療成績などから判断すると，日本国内の全体の医療レベルが非常に進歩し，高いレベルの医療成績を残すに到っていることがよく理解できた．限られた分野での最近のトピックスとしてはやはり，大動脈瘤治療でのステントグラフトの国内承認に伴う進歩と左室形成術とその理論の進歩が挙げられるであろう．日本国内の医療情勢に関することとしては，理事長講演でも示された医療安全委員会（仮称）の設立の問題と心臓血管外科手術施設の集約化の問題が上げられるであろう．学会期間中に医療安全委員

Presented by Medical*Online

写真3　記者会見

会に関する日本心臓血管外科学会の意向が記者会見で発表されるということも行われました(**写真3**).最近の学会では学問や臨床の話題だけでなく，医療安全や今後の医療体制に関するテーマが増加したことも最近の特徴であり，このことは日本の現在の厳しい医療情勢を反映しているものと考えられる．今後の学会のあり方を先示すひとつの学会であったように思われる．

Presented by Medical*Online